支店長の わがまち紹介 第67回

春には約55万本の美しいヤマザクラが咲き誇る

桜川市

筑波銀行は地域金融機関として、地域の皆さまとの密接なつながりを持たせていただいております。「支店長のわがまち紹介」は、筑波銀行の支店長が所在エリアの市町村をご紹介させていただくコーナーです。今回は茨城県桜川市です。真壁支店長が桜川市長 大塚秀喜氏にお話を伺いました。

桜川市は「筑波経済月報」第22号（2015年5月）第22回の本コーナーにて紹介させていただきました。改めて、市の魅力や特徴、展望などについてお聞かせください。

■「ヤマザクラと市民の幸せが咲くまち 桜川」

桜川市では、2017年3月、今後10年間のまちづくりの指針となる「第2次総合計画」を策定しました。この計画では、まちの将来像を「ヤマザクラと市民の幸せが咲くまち 桜川」と定めました。

本市の桜は、古来、「西の吉野、東の桜川」と並び称されてきました。しかし、吉野山に咲く「ヤマザクラ」は約3万本、一方、本市内の山々に咲く「ヤマザクラ」は約55万本と推定され、吉野山の約18倍もの数を誇ります。

本市は、「日本一のヤマザクラ」を守りながら、次代に伝えていくことを目指し、2017年4月より、新たに「ヤマザクラ課」を設置しました。

また、同課には「ヤマザクラ」に関する専門的な知識を有した「専門幹」を配置し、保全計画の策定などを進めています。

■ 日本人が親しんできた「ヤマザクラ」

「ヤマザクラ」は、「ソメイヨシノ」のように人の手でクローン増殖されたものではなく、昔から山に自生しているものです。一本一本遺伝子が異なるため、花の色や形、開花時期に違いが生まれ、桜の季節には日々移ろう山の表情を楽しむことができます。

現在、日本の桜のほとんどが「ソメイヨシノ」となりましたが、江戸末期までは「ヤマザクラ」が中心でした。「花といえば桜」といわれるほど日本を象徴する花であり、日本人が古くから詩や歌に詠み親しんできた桜は、「ヤマザクラ」なのです。

■ 市民が「ヤマザクラ」に心を寄せ、山を守る活動を展開

市民は、今まで身近な山々に咲いていた「ヤマザクラ」の数が、実は「日本一」であったことを知り、「日本一のヤマザクラの里」として、自分達のまちに誇りを持つようになりました。

市民の中には、自主的に山へ入り、下刈り作業に勤しむ人もおり、大変頼もしく感じています。これから、さらに多くの市民が「ヤマザクラ」に

桜川市長
大塚 秀喜 氏

総合戦略部 次長
兼 ヤマザクラ課長
市塚 久弐 氏

総合戦略部 次長
兼 地域開発課長
上野 茂雄 氏

総合戦略部
ヤマザクラ課
専門幹 渡邉 雄司 氏

経済部 次長
兼 商工観光課長
鈴木 政俊 氏

真壁支店長
鈴木 渉

心を寄せ、「日本一のヤマザクラの里」を守る活動へ積極的に参加していくことを期待しています。

また、来年度から開始される森林環境税（仮称）および森林環境譲与税（仮称）の財源をはじめ、国や県からの支援制度などを活用しながら、自然環境の整備にさらに力を入れてまいります。

■「日本一のヤマザクラの里」を守るために

本市では、「ヤマザクラ」の魅力を伝えていくため、様々な活動を展開しています。

その1つに、2018年10月より、市内を走るコミュニティバス「ヤマザクラGO」が「ヤマザクラ」のピンク色を基調にラッピングされ、親しみやすい外観になりました。市民の日常の足はもとより、観光客の方にも「ヤマザクラGO」をご利用いただき、市内の観光名所を巡っていただきたいです。

市内を走るコミュニティバス「ヤマザクラGO」

また、2017年から始めた「ヤマザクラの花咲く里事業」があります。これは、市内の小学校に通う低学年の児童が山へ入り、「ヤマザクラ」の種を拾って苗木を育て、最終的に山へ戻す活動です。

今は小さな芽が育ち始めたばかりですが、子どもたちが卒業する頃には、立派な苗木となって山に帰り、力強い根を広げていくことを期待しています。

そして、将来、苗木を育て、植樹した子どもたちが大人になった時、山にしっかりと根を張って、美しい花を咲かせる「ヤマザクラ」の姿を想い、自らも自分らしい花を咲かせてくれることを熱望しています。

■ 観光名所に観光客を呼び込むために

「ヤマザクラ」のほかにも、本市が誇る名所はたくさんあります。その1つが真壁地区の「重要伝統的建造物群保存地区」です。

「重要伝統的建造物群保存地区」では、毎年、2月4日～3月3日にかけて、歴史ある町並みを舞台とした「真壁のひなまつり」を開催しており、期間中は多くの観光客で溢れ返ります。

「真壁のひなまつり」は、今年度で17回目を迎え、本市が誇る一大イベントとして定着しています。近年は、各家の雛人形を飾る住民が高齢化するなどの課題も見えてきました。しかし、地元の若い力が集まり、自主的に企画した「まかべ日和」や「まかべ十三夜祭」などのイベントが次々と開催されており、大変心強く感じています。

また、国指定史跡の「真壁城跡」では、戦国時代の庭園をはじめ、茶室や能舞台の跡が発見されました。今後は発掘成果を基にこれらを復元し、本市の新たな観光資源にしたいと考えています。

このほか、本市は、安産・子育ての霊験あらたかな寺院として名高い「雨引観音（雨引山楽法寺）」、温州みかんの北限地である本市に育つ「酒寄（さかより）みかん」や香り高い「福来（ふくれ）みかん」など、魅力ある地域資源に溢れています。

今後も市民の皆さんと協力し、これらの資源を活かす取り組みを展開することで、多くの観光客に本市へ足を運んでいただきたいと考えています。

「真壁のひなまつり」

■ 子どもの社会性を育む「義務教育学校」の開校

全国的に問題となっている少子化の波は、桜川市にも例外なく訪れています。

そのような中、本市は2014年6月、今後の10年間の教育環境を見据え、市内小中学校の適正配置計画を策定し、2018年4月に、県西地区で初となる義務教育学校「桜川市立桃山学園」を開校しました。

桃山学園では、前期課程の5・6年生において後期課程職員による乗り入れ授業（専科指導）を取り入れるなど、専門的な授業を展開しています。

また、校内では、前期課程と後期課程の児童と生徒が笑顔で交流する姿を見られ、大変ほほえましく感じています。

学年を超えた学内活動の様子

■ ICT技術を活用し、フィリピンの子どもたちと交流

本市は、2017年10月より、インターネットビデオ通話サービスを活用して、市内の小学校とフィリピン共和国カヴィテ州バコール市内にある小学校を結び、子どもたちの英会話交流を展開しています。

交流の時間には、児童がフィリピンの子どもたちと楽しく英語で話し合ったり、歌を披露したりしています。

子どもたちが英語の授業に加え、遠く離れた同世代の子どもたちと実際に英語で会話することで、英語への興味・関心を高め、視野を広げることができると考えています。

2018年5月には、同市と「友好交流都市協定」を締結しました。今後は、文化や芸術、スポーツ、福祉、産業など幅広い分野で、交流・協力していく予定です。

2018年10月に開院した「さくらがわ地域医療センター」

■ 安心して暮らせる「コンパクトシティ」の創造

本市は、市民が安心して暮らせるまちづくりを目指し、地域開発課が中心となって北関東自動車道桜川筑西IC周辺の開発に取り組んでいます。計画面積は56.3ha、計画のコンセプトは「医、職・食、住がそろったコンパクトシティ」です。

2018年10月には、同地区の核となる「さくらがわ地域医療センター」が開院しました。今後は、大規模な公園整備をはじめ、大型商業施設や農産物直売所、80を超える分譲住宅地の造成、医療施設や福祉施設の誘致などを順次実施していく予定です。

このように、本市の魅力を高めることで、若い世代の市外流出を防ぐとともに、交通利便性を活かして栃木県や群馬県との交流人口の増加や首都圏からのシニア層の移住促進などにも力を入れていきたいと考えています。

■ 筑波銀行に期待すること

本市は、2017年3月、筑波銀行と「地域振興に関する協定」を締結しました。現在は、真壁支店長などにご協力いただきながら、地域振興に関する活発な情報共有を図ることができていると感じています。

また、本市内の特産物の中から、特に優れた産品を選定する「さくら川百貨選定審査委員会」にもご協力いただき、大変感謝しています。

今後も本市の地域振興のために、筑波銀行が持つ情報や人財、幅広いネットワークを活用させていただきたいと考えています。

取材日：平成30年12月14日
写真提供：桜川市